

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の基本構造編

【第5回】構造助詞編

覚えてるかい？ 文の成分の中で、常に名詞、または名詞句でならなきゃならなかったのって何だったわけ？

え？ 忘れた？ おいおい、1からやり直しだぜ。

主語と目的語だよ。

君たちはすぐにノートに写してわかったつもりになるけど、だめだよ、それでは。

頭のノートに書いとけよ！

文の先頭に置かれた名詞または名詞句が主語、述語の後に置かれて作用の客体になる名詞または名詞句が目的語だよな。

もう一度思い出せ。

でもな、主語や目的語が名詞っていつても、実際にはそう見えないこともある。

たとえば「人を殺すのはだめだ」って日本語を漢文にすると「殺^{スハ}人、不^{ナリ}可^{ナリ}」となるけど、「人を殺す」は名詞には見えないよな。

でも、よく考えると、この主語「殺人」は「人を殺すこと」っていう意味なんだから、名詞句なんだってわかるだろ？

「人を殺すのを許さない」の場合でも、漢文では「不^サ許^{スラ}殺^{スラ}人」となるけど、目的語「殺人」はやっぱり「人を殺すこと」だろ？

名詞句なんだ。

漢文はこれでも十分成立しているし、表現上なんの問題もないんだけど、それがより名詞句であることをはっきりさせる働きの語を用いることがあるんだよ。

その時用いられるのが構造助詞なんだ。

1. 構造助詞

構造助詞には実はいろんな働きがあるんだが、細かいことを言い始めると大変なんで、君たちはとりあえず「**名詞句をつくる語**」というのだけをわかってもらおうかな。

君たちが覚えなきゃならない構造助詞には3つある。

「所」「者」「之」の3つだよ。

これらは順に「ところ」「もの」「の」なんて読むけど、それは訓読上そうしてるだけで、別にたとえば「場所」「人」「くが」の意味というわけじゃない。

訓読は日本語、そのまま古典中国語とはつながらないという大前提を忘れないでくれ。

2. 構造助詞「所」

3つの構造助詞の中でも、君たちが特に注意しなきゃならないのがこの「所」だよ。

いいかい？もう一度言うが、「ところ」と読むけど、この字自体が「場所」という意味であるわけじゃない。

客体を表す名詞句を作るのがこの語の働きだ。

たとえば、「食^ヲ」は「食べる」という意味の動詞だけど、「所」を用いると次のように名詞に変わっちゃう。

動詞	食 ^ヲ	名詞句
(食べる。)	↓	所 ^ヲ 食 ^ヲ
		(食べるもの＝食べ物)

ちよつとややこしい説明になるんだが、「所」の働きを根本的に理解してもらうために、きちんとした説明をするぞ。

「所」は「食^ヲ」の客体を表す名詞句を作るから、「所^ヲ食^ヲ」は「ソレを食べるソレそのもの」という意味になる。

「所」がソレだよ。

「食^ヲ」の客体だから「ソレを食べる」のソレを指すわけだ。

つまり、「食べるソレ」ってことだ。

だから、「食べるもの」すなわち「食べ物」という名詞になる。

動詞「食^ヲ」は、まあ独立した文になることができ、単独で用いれば「食べる」という述語になるが、「所^ヲ食^ヲ」は「食べ物」という単なる名詞、つまり部品でしかないから、それと固定的な成分名は与えられない。

主語にも目的語にもなり得るな。

いいかい？「食らふ所」と訓読するからといって、「食べる場所」つまり「食堂」って意味じゃないんだぜ。

さて、「所^ヲ食^ヲ」(食べ物)は名詞だから、その前に他の名詞や代詞を置けば、修飾語＋被修飾語の関係になる。

修飾語 被修飾語（名詞句）

我_レ所_レ食_ヲ （私の食べ物＝私が食べるもの）

そして、これ全体がまた「私の食べ物」という名詞句になるわけだ。
これをさっきの「ソレ」を使って言えば、「私の、ソレを食べるソレそのもの」だ。
だから、「私の食べ物」すなわち「私の食べるもの」となる。

さらに名詞句「所_レ食_ヲ」は他の名詞を連体修飾することもできるから、次のように、たとえば後に名詞「桃」が置かれれば、「ソレを食べるソレそのものである桃」って意味になる。

つまり、「食べる物」である「桃」、つまり「食べる桃」という意味を表すことになる。

修飾語（名詞句） 被修飾語

所_レ食_ヲ 桃 （食べ物である桃＝食べる桃）

「食べる桃」、つまり「食用の桃」ってのを漢文で表現しようとして、そうだそうだ！漢文は「連体修飾語＋被修飾語」の語順だった！といって「食_ヲ桃」と表現してみてもだめ。

これは誰がどうみたって「桃を食べる」って意味にしかない。

そんなつもりはない、食用の桃なんだよ！って、いくらごねてもだめ。

百人の中国人が百人とも「桃を食べる」って意味に理解しちゃう。

なぜかって？

そりゃ「食_ヲ」は、普通は「（くを）食べる」という意味の他動詞なんだから、その後に名詞が置かれれば、「食_ヲ」の目的語になってしまうからさ。

「食べる桃」は構造助詞の「所」を使わない限り表現しようがないんだよ。

構造助詞「所」には、後の動詞を名詞化することによって、本来他動詞の目的語である語に対して、その修飾語とする働きもあるんだ。

さて、これを「我_レ所_レ食_ヲ」と組み合わせると、「私の食べる桃」という意味を表すことが可能になる。

修飾語 被修飾語

我_レ所_レ食_ヲ 桃 （私の食べ物である桃＝私が食べる桃）

修飾語 被修飾語

これを「ソレ」を使って言ってみな！ どうだい？

そう、「私の、ソレを食べるソレそのものである桃」だよ。

つまり、「私の、食べるものである、桃」、だから「私の食べる桃」って意味になるんだね。

これらの構造はほかの構造助詞「之」をあわせ用いて、次のように表現することもある。
でも、語と語との関係や、表す意味は同じだよ。

修飾語 被修飾語（名詞句）
我之所食
（私の食べ物Ⅱ私が食べるもの）

修飾語 被修飾語
我之所食桃
（私の食べ物である桃Ⅱ私が食べる桃）

こうしてできた名詞句が、文の成分の色々な成分になり、主語になったり、目的語になったりするわけだ。
名詞述語として述語になる場合だってあるぞ。

主語（名詞句） 述語
我所食桃、甘。
（私の食べる桃は、甘い。） …主語になる

主語 述語 目的語（名詞句）
彼奪我所食桃。
（彼が私の食べる桃を奪う。） …目的語になる

主語 名詞述語（名詞句）
此、我所食桃。
（これは、私の食べる桃だ。） …名詞述語になる

◎ポイント！…構造助詞「所」は後の動詞の客体を表す名詞句を作る。

・所_レB_{スル}

▼B_{スル}所_{ところ}

▽B_{スル}するもの〔こと〕

・A_所 B_{スル} ・A之所 B_{スル}
▼AのBする所・AのBする所
▽AがBするもの「こと」

・所_{スル} B_{スル} C
▼Bする所のC
▽BするC

・A_所 B_{スル} C ・A之所 B_{スル} C
▼AのBする所のC・AのBする所のC
▽AがBするC

↓「所」によって作られた名詞句は、文の主語・目的語、名詞述語などになる。

ところで、「所」は名詞句を作る構造助詞で、「ところ」と読んでも、それ自体に「ところ」という意味があるわけじゃないと言ったけど、「所」の後に来る動詞の性質によっては場所を表すこともあるんだよ。つまり、次の通りさ。

所 + 他動詞	↓	くするもの・こと・ひと等
所 + 自動詞	↓	くする場所

後に置かれる動詞が他動詞か自動詞かによって、実は「所」名詞句の表す意味が異なるんだ。

まず、他動詞の場合、たとえば「所_{スル}食_{スル}」は、「ソレを食べるソレそのもの」から「食べるもの」という意味を表して、他動詞「食_{スル}」に対してその客体すなわち食べるもの自体を表すことになる。したがって、この場合、「くするもの・こと・人」などと訳すことになる。

ここまでではいいよね？

そもそも、「所感」とか「所見」「所懐」って言葉を聞いたことがないかい？

場所って意味じゃないだろ？

ふだんから君らは使ってるんだよ、この構造助詞を、実は。

それに対して、**自動詞の場合は、「所」は動詞に対して主にその場所を表すんだ。**

たとえば「項王_在」は「項王がいる」という意味だけど、「項王_所在_{スル}」は、「項王のソコにいるソコ」から「項王がいる場所」という意味になるんだ。

今度は「所」を「ソコ」に置き換えてみたわけ。

え？　なんで「ソコ」なのかって？

「食」の場合は、何を食べるという、他動性の目的語をとるから、食べる客体は「ソレ」だよ。
「ソレを食べる」のソレだ。

だけど、「在」の場合は、どこにいるという、依拠性の目的語をとるだろう？

「ソコにいる」の「ソコ」だよ、だからだね。

「所在」って言葉、これも君らは使ってるだろう？

この場合も「所」が場所という意味をもってるんじゃないかって、自動詞「在」との関係で、作られた名詞句が場所を表すだけなんだよ。

勘違いすんなよ。

ところで、君らがちゃんと「所」の働きがわかってるかどうか、ひとつテストしてみようかな。

「所」は後に伴う動詞の客体を表す名詞句を作るって言ったよね？

だから、「所_レ食_ル桃_ヲ」（桃を食らふ所）と読んで、「桃を食べること」という意味には絶対になり得ない。

なぜだい？

そりゃそうだね、「所」が「食」の他動性の客体を表しているのに、その「食」が別に他動性の客体「桃」を伴えるわけがないよな。

でもな、「所_レ与_ル桃_ヲ」の場合は、「所_レ与_ル桃_ヲ」（与ふる所の桃）も、「所_レ与_ル桃_ヲ」も、どちらも漢文として成立するんだ。さて、どう違う？

うん、「所_レ与_ル桃_ヲ」の方は簡単だね、「ソレを与えるソレである桃」って意味だから、「与える桃」という名詞句になる。

じゃあ、「所_レ与_ル桃_ヲ」は？

たとえば、「問_フ所_ヲ与_ル桃_ヲ」って文は、どいう意味だい？

もちろん「桃を与えることを問う」って意味じゃないよ。

なぜなら、「所_レ与_ル桃_ヲ」は、すでに「与_ル」が他動性の客体として「桃」を後にとってるからな。

じゃあ、どいう意味だい？

そう、他動性の客体ではなく依拠性の客体を「所」が表してるんだ。

つまり、「ソレに桃を与えるソレそのもの」、もっとわかりやすく言えば、「ソノヒトに桃を与えるソノヒトそのもの」だ。

「問_フ所_ヲ与_ル桃_ヲ」は、「桃を与えた人を問う」、つまり「誰に桃を与えたかを問う」って意味になるんだね。

このことがよくわかってないから、問題集で、他動性の客体を「所」が表していて、「所_レA_{スル}B」と読まなきゃいけないのに、「所_レA_{スル}B」って読み誤ってたりするんだ。

学校の先生なんかも、かなり怪しいぞ、気をつけろ！

「所」は、簡単なように見えて、実は奥の深い語だよ、しっかり復習しとけよ！

3. 構造助詞「者」

「『者』は多義語で、『人』とか『もの』とか『こと』、『時』など色々な意味を表すから注意してくださいね♪」なんて、学校や塾で習ったことないかい？

まあ、この説明は必ずしも間違っちゃいない。

でも、それはあくまで結果的にそうなるだけのことであって、実は名詞句を作る構造助詞としての「者」という字自体にそんな具体的な意味があるわけじゃないんだ。

確かに、「もの」「こと」「とき」、場合によっては「は」と読んだりするんで、そう思うのもしかたないんだけどね。

構造助詞としての「者」は、やっぱり名詞句を作るのが一番重要な働きだね。

この「者」は、ほんとすごい構造助詞なんだよ。

たとえば、「昨日、お父さんとデパートの7階のレストランに行ってオムライスを食べた」というのは、独立した文だろ？

ところが、その後に「者」を置いた瞬間、「昨日、お父さんとデパートの7階のレストランに行ってオムライスを食べたこと」という名詞句になってしまう。

つまり、どれだけ前が長かろうが、いつぺんに名詞句にしてしまう、すごい構造助詞なんだ。

前に説明した「所」が「所^{スル}」で、^{スル}する対象のものやこと、つまり客体を表す構造助詞だったのに対して、「^{スル}者」は、^{スル}する主体のものやことを指す。

つまり、「所^{スル}食^ヲ」は「ソレを食べるソレ」から「食べるもの」という意味を表して「食べる」という行為の客体を表すけど、「食^ヲ者」は同じ「食べるもの」でも、「食べる」という行為の主体である、たとえば「食べるひと」を指すことになるんだ、「食べること」でも同じだな。

奪^ハ項^ヲ王^ノ天下^ヲ者^ニ

(項王の天下を奪う。)

右の文は独立した文だろ？ ところが、後に「者」が置かれると、

奪^ハ項^ヲ王^ノ天下^ヲ者^ニ

(項王の天下を奪うもの・こと ≡ 名詞句)

「項王の天下を奪うもの」とか「項王の天下を奪うこと」という名詞句に変わってしまう。

いいかい？ 「者」が「人」や「こと」という具体的な意味を表してるんじゃない、「者」によって名詞句になり、文脈から人を指したり、事物を指したりするんだ。

主語

述語

奪^ハ項^ス王^ヲ天下^ヲ者^ハ、必^ズ沛公也。

(項王の天下を奪うものは、きっと沛公である。)

そして、このように文の主語になりやすくなる。

だって、主語は名詞句じゃなきゃならないからな。

実は、「者」がなくなつて文は成立して、「奪^ハ項^ス王^ヲ天下^ヲ」を名詞句とみなして主語にすることはできるよ。

でも、「者」を置くことで、より名詞句であることをはっきりさせることが可能になるんだ。

そして、「者」は、「項王の天下を奪う」という行為の主体を表してるだろ？

そこんところをしっかりと確認しといてくれよ、いいかい？

さて、「奪^ハ項^ス王^ヲ天下^ヲ者^ハ」は、この文脈なら、「項王の天下を奪うもの」、つまり「人」を指してるよね。

でも、違う文脈では、「項王の天下を奪うこと」という意味になって、事物を指す場合だって当然あるわけな。

状態を指すことだってあるぞ。

◎ポイント！…構造助詞「者」は前の文を名詞化する。

・ B^ス C^ヲ (CをBする。) ・ A B^ス C^ヲ (AがCをBする。) …独立した文。



B^{スル} C^ヲ 者 (CをBするもの・こと) …名詞句

A B^{スル} C^ヲ 者 (AがCをBするもの・こと) …名詞句

↓「者」によって作られた名詞句は、文の主語・目的語、名詞述語などになる。

「者」には、名詞句を作る働き以外にも、主語を示したり、語調のポーズを表したり、前後二つの句からなる複文の前句末で用いて「(もし)くば、…」という仮定を表したりすることもあるんだ。

こういう働きだって、本当はちゃんとわかってほしいんだ。

いずれそれは教えるとして、今はまず「『者』は主体を表す名詞句を作る」という点にしばって、重点的にマスターしてくれ。

4. 構造助詞「之」

「之」って、よく見かける漢字だよな。

「これ」って読むこともあるし、「の」って読んだりもする。

教科書見れば、1ページにいくつも登場してくる漢字なんで、それじゃあちゃんとわかってるのか？っていうと、これが全然わかってない漢字でもあるんだ。

「これ」って読んでも、読み通り「これ」という、前後に示された内容を指す指示代詞のことであれば、そうでないこともある。

「の」って読むから日本語の格助詞「の」とか「が」の意味なのかと思うと、全然そうじゃない場合もあって、結構難しい漢字なんだぜ。

一番危ないのは、「の」って読んてるから「の」って意味、「これ」って読んてるから「これ」って意味だと思い込むことで、その方向性の理解のしかたで、教壇の先生までがそんなこと言ったりするから困ったもんだ。

いいかい？君たちはそろそろ慣れてきたろ？

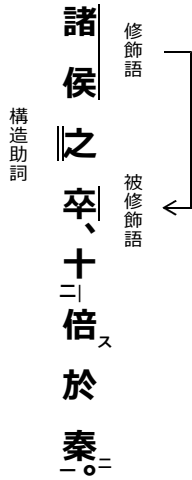
「こう訓読するからこういう意味」なんじゃなくて、「こういう意味だからこう訓読する」が正しい理解の方向だったよな？

このことを今一度押さえといた上で、さあ構造助詞「之」の用法を勉強してもらおう。

構造助詞「之」には色々な働きがあるんだが、その中から特に「連体修飾の関係を示す」、「文の独立性を取り消して名詞句を作る」、「時の関係を示す」、「倒置を示す」という4つの大事な働きを君たちは理解してほしい。

① 構造助詞「之」の働き（連体修飾の関係）

まず、連体修飾の関係から。



▼諸侯の卒、秦に十倍す。

▽諸侯の兵卒（の数）は、秦の十倍である。

右の文の場合、「諸侯」卒」と、「之」を用いずに表現しても、「諸侯の卒」という意味を表すことはできるよ。

でも、構造助詞「之」を用いることで、「諸侯」が「卒」を連体修飾する関係なんだということがより明確になるんだ。

それがこの「之」の連体修飾の関係を示す働きだ。

この用法の場合の「之」を、日本語の格助詞「の」と訓読するのは、働きに全くズレがなくて理解しやすいね。

◎ポイント……構造助詞「之」は連体修飾の関係を示す。

	名詞	名詞
・ A		B
之		
(A の B)		

構造助詞

②構造助詞「之」の働き（文の独立性を取り消して名詞句を作る）

次に、ちよつと理解が難しいのが、文の独立性を取り消して名詞句を作る働きだ。

ここはひとつ気を入れて聞けよ。

この働きをもうちよつと詳しく説明すると、文は「主語＋述語」、あるいは「主語＋述語＋目的語」という成分で構成されることが多いだろう？

これらは独立した文になるんだが、この**主語と述語の間に「之」を置くと、文の独立性が取り消されて名詞句になるんだ。**

ん？ちんぷんかんぷんだって？

しかたがないな、じゃあ、あの有名な「矛盾」の例文で説明するから、耳の穴かつぽじってよく聞けよ。

主語 述語
吾 盾 堅。
(私の盾は固い。)

この文は、主語「吾 盾」＋述語「堅」からなる、独立した文だろう？

「私の盾は固い」で、文として完結してるじゃないか。

ところが、その主語「吾 盾」と述語「堅」の間に構造助詞「之」を置くとどうなるか。

主語 述語
吾^ガ 楯^{タテ} 之^ノ 堅^{キコト}
構造助詞
(私の盾が固いこと)

「之」が置かれた瞬間に、文の独立性が取り消されて、「私の盾が固いこと」という名詞句、つまり一つの部品に変わっちゃうんだ。

もはや「吾^ガ 楯^{タテ}」は主語ではなく、「堅^ツ」も述語ではなくなるんだよ。

「之」によって名詞句という部品になるわけだから、それ自体に単独の成分名は与えられない。でも、名詞句だから、次のように文の主語や目的語という成分になりやすくなるんだ。

主語

吾^ガ 楯^{タテ} 之^ノ 堅^{キコト}、莫^モ 能^{ケル} 陷^ス 也^ナ。

▼吾^ワが楯^{タテ}の堅^{カタ}きこと、能^ユく陷^トすもの莫^ナきなり。

▽わが盾の固いことは、何物も突き通せないのだ。

わかったかな？ 「矛盾」って、教科書の一番最初に載ってるじゃないか？

でも、実はいきなりこういう難しい構造の文章での漢文入門だったんだよ。

さて、念押しにもう1つ例を見てみよう。

どういう構造になってるのか、自分で考えてごらん。

目的語

患^フニ 秦^{シン} 兵^{ヘイ} 之^ノ 来^{キタル}。

▼秦^{シン}兵^{ヘイ}の来^キたるを患^{うれ}ふ。

▽秦軍が攻めてくるのを心配する。

「秦^{タル} 兵^{ヘイ} 来^{タル}」なら、主語「秦^{タル} 兵^{ヘイ}」＋述語「来^{タル}」の独立した文だろう？

だけど、その主語と述語の間に構造助詞「之」を置くことで「秦^{タル} 兵^{ヘイ}が来ること」という名詞句になるわけだ。

だから、目的語にしやすい。

どうだい？合ってたかい？

「吾^ガ 楯^{タテ} 之^ノ 堅^{キコト}」にしても「秦^{タル} 兵^{ヘイ} 之^ノ 来^{タル}」にしても、「之」を日本語の格助詞「の」と読んでいるからといって、「ゝが」という主格を表しているわけじゃないんだよ。

そんなふうに教える人もあるから困るんだが、「之」はあくまで構造助詞。
日本語と中国語をいっしょくたにして考えちゃだめだぜ。

◎ポイント！…構造助詞「之」は、主語と述語の間に置かれて文の独立性を取り消し、名詞句を作る。

主語 述語
・ A | B |
←
A | B |
之 | B |
B |
C |
(AがBする。) …独立した文

(AがBすること) …名詞句

主語 述語 目的語
・ A | B | C |
←
A | B | C |
之 | B | C |
B | C |
(AがCをBする。) …独立した文

(AがCをBすること) …名詞句

③構造助詞「之」の働き（時の関係を示す）

次に、時の関係を示す用法を説明するぜ。

構造助詞「之」は、「主語A＋述語B」や「主語A＋述語B＋目的語C」の形で独立する、文の主語と述語の間に置かれて、「A之B」、または「A之B之C」の形で用いられることがある。

これは、前後に2つの句からなる文の前半部に用いるんだ。

そして、後半の状況が出現したり行為が行われる時、つまり「AがBする時」「AがCをBする時」という意味を表す。

まず例を示そう。

本来の主語 本来の述語

帝王 之 生 必 有 怪 奇。

構造助詞

▼帝王の生まるるや、必ず怪奇有り。

▽帝王が生まれるとき、必ずあやしく不思議な出来事が起こる。

「帝王^{マル}生^ル」が前句、「必有^ス怪^ル奇^リ」が後句だよ。

これだと「帝王が生まれる」と「必ず不思議な出来事が起こる」という、それぞれ独立した文なんだが、前句の主語「帝王」と「生^{マル}」の間に構造助詞「之」を置くことで、やっぱり文の独立性を取り消して、今度は時の関係を表すことになるんだ。

つまり、「帝王が生まれる時」という意味の名詞句になる。

なんでそうなるかって？

たとえば、「今」というのは名詞だし、「貞観二年」というのは名詞句だろう？

でも、「今、我知^ル之^ヲ」（今、私はこのことを知った）とか、「貞観二年、京師大旱^ス」（貞観二年、都は大いに日照りになった）とかは、「今」や「貞観二年」は、後にかかって修飾する働きをしてるじゃないか。

それと同じで、「帝王之生^{マル}」が「帝王が生まれる時」という名詞句を作り、後の句を修飾することになるのさ。

もちろん「帝王之生^{マル}」が、常に「帝王が生まれる時」という意味に限定されるわけじゃない、「帝王が生まれること」という名詞句の場合だってあるさ。

たとえば、「我知^ル帝王之生^{マル}」の場合なら、「私は帝王が生まれることを知る」という意味になる。こういう意味の名詞句になるかは、文脈で判断しなきゃならないんだ。わかったかな？

さて、「之」によって作られる名詞句が時の関係を表す場合、前句末に語気詞「也」が置かれることも多くって、次のようになることもある。

帝王^{マル}之^ル生^ル也、必有^ス怪^ル奇^リ。

▼帝王^{マル}の生^ルまるや、必ず^{かならず}怪^{くわい}奇^き有り^あ。

この場合は「也」を「や」と訓読するんだ。

「也」は文中でポーズの働きをすると共に、その前の語や語句を強める働きがある。

ここでは「帝王之生」という語句を強め、いったん語勢を休止する働きをしているんだ。まあ、我々は「也」があるかないかで訳を変えたりはしないけどな。

◎ポイント……構造助詞「之」は、前後句からなる文の前句において、主語と述語の間に置かれて時の関係を示す。

本来の主語		本来の述語	
・ A	は	B	（也）、
構造助詞		語気助詞	
・ A	は	B	（也）、
構造助詞		語気助詞	
▼ AのCをBするや、	、	▼ AのCをBするや、	、
▽ AがCをBする時、	、	▽ AがCをBする時、	、

④ 構造助詞「之」の働き（倒置を示す）

さて、構造助詞「之」の働きの最後は、倒置を示す標識だ。

「標識って？」と思っただろ？

いや、まさに標識の働きなんだ。

「これ」という意味じゃないんだよ。

「倒置文ですよ」って知らせる標識の役割をするんだ。

ここまでの講義で、漢文にとって、いかに語順が大事かってわかったろ？

「食牛」なら「牛を食べる」だし、「牛食」なら「牛が食べる」になる。

それ以外の意味なんて表せないってこと、理解できてるだろ？

逆に言うと、語順が違っていると正しい意味を表せないってことになるな。

でも、我々だって、「牛肉を食べる」を、もっと強めて言いたい時ってあるだろ？

たとえば、「羊でも豚でもなくて、牛の肉を食うんだ！」って強く言いたい場合さ。

漢文なら、「牛」を強調するために文の先頭に出したいところだよな。

でも前に出すと、「牛食」になっちゃう。

表現した本人は「ほかでもない牛を食う」と言ったり書いたりしたつもりでも、読む側はやっぱり「牛が

食べる」だよ。

そういう語順になってるんだから、致し方がない。

そこで、「そうじゃないよ、これは倒置文なんだよ」ということを示すために置かれるのが「之」という

標識なんだ。

つまり、「之」は倒置構造を作る構造助詞でもあるんだ。

例を示そう。

述語 目的語

愛ス 菊ヲ

▼^{きく}菊を^{あい}愛す。
▽菊を愛する。

目的語

述語

菊^{きく}之^{これ}を^{あい}愛^す。

構造助詞（倒置を示す標識）

▼^{きく}菊を^{これ}之^{あい}を^す。
▽（ほかでもない）菊を愛する。

もし「菊 愛」という語順だと、文の先頭に置かれた名詞は主語だから、ん？「菊」が誰かを愛する？ん？ん？ってことになってしまう。

もしかして菊って人の名前かなあ…なんてな。

お菊さんは「1まゝい、2まゝい…」で有名な、番町皿屋敷の幽霊だよ。

そうじゃなくて「（ほかでもない）菊の花を」という意味、つまり「菊」が強調するために倒置された目的語であることを示すために、「之」という標識を置くんだ。
わかったかな？

ところで、この場合の「之」は訓読では「これ」って読むで。

でも、何かを指示している指示代詞ではないから注意しよう。

もちろん、「これ」って訳したりすんなよ。

◎ポイント！…構造助詞「之」は、倒置を示す標識の働きをする。

述語 目的語

・A^ス B^ヲ

…通常の語順

目的語

述語

B^ヲ 之^{これ} A^ヲ

…倒置文

構造助詞（倒置を示す標識）

▼Bを^{これ}之^{あい}を^す。
▽BをAする。

構造助詞「之」を用いる倒置文で、よく用いられる形がある。
最後にそれを紹介しとこうかな。

問題集とか使って自分で演習してる奴は見たことあるだろう？ 「此之謂也」とか「此之謂乎」っ

て文。

しよつちゅう出てくるよな？

これ、実は倒置文なんだ。

何？見たことないって？ そりゃ、勉強が足りんのだよ、反省しろ！

たとえば「此之謂也」の場合、「此之謂也」(このいひなり)と「此之謂也」(これをこれいふなり)という2つの読み方が行われてる。

実際、入試問題や問題集でも2通りの読みが見られるよな。

訓読は日本語訳なんだから、どちらが正しいかなんて簡単には言えないけど、どちらが語法的には妥当な読み方かは言えるよ。

だいたいどっちが妥当なのか予想がつくだろう？

この文を倒置しない普通の語順と比べてみよう。

(ふ) 謂之也。

たとえば、話の流れとして、色々と事情は違っても根本的には大差がないことを述べたとするだろう？ それを受けて、「『五十歩百歩』とは、このことをいうのだ」と結論を出す。

そういう用いられ方で、(ふ)の部分に「五十歩百歩」が入る。右の例はそういうふうに見てくれ。つまり、指示代詞の「之」は、そこまで述べられた内容を指すわけだ。

さて、「このことをいうのだ」を、もっと強めて「ほかでもないこのことをいうのだ」と言いたい時、代詞「之」を述語「謂」の前に出すわけだ。

その形がちよっと紛らわしいんで、次の例で漢字の対応を見てくれ。

(ふ) 謂之也。

(ふ) 此之謂也。

構造助詞

▼ (ふとは、) 此を之れ謂ふなり。

▽ (ふとは、) (ほかでもない)このことをいうのである。

指示代詞の「之」は句の頭には置きにくい性質の語なんで、別の指示代詞「此」に置き換える。そして、倒置を示す標識「之」をその後に置いたわけだ。

つまり、同じ「之」でも、右は指示代詞、左は構造助詞なので、混乱しないようにな。

さて、「このことをいうのだ」というのは、要するに「この意味だ」ということだから、訓読では古典中国語文法とは無関係に「此之謂也」(▼此の謂ひなり)と読んだり、「此之謂也」(此の謂ひなり)と読んだりするんだ。

最近はどこらかというところ、語法通り「此之謂也」と読まれることが多いけど、訓読は日本語訳なんだから、「此之謂也」と読んだからといって、間違いとは言えないんだよ。

ところで、この句を疑問形にすると、次のようになる。

(之) 謂之乎。

(之) 此之謂乎。

構造助詞

▼(之とは、) 此を之れ謂ふか。

▽(之とは、) (ほかでもない) このことをいうのか。

確認や肯定的判断の語気を表す語気詞「也」を、疑問の語気を表す語気詞「乎」に換えたただだよ。

ちよいと頭の切れる弟子なんか、先生の話を聞いて、「なるほど、先生に教えていただいたことを踏まえて考えますと、『之とは、このこと』(『先生がおっしゃったこと』)をいうのですか？」なんて感じで質問したりする、そんな感じで用いられることが多いかな。

君たちも、そろそろそんなふうに質問してくれよ。

指示代詞の「之」が述語「謂」の前に倒置して出される時に、別の同意の漢字「此」に換えるという話をしたけど、ほかに「是」や「斯」が用いられることもあるぞ。

つまり、「是之謂也」とか「斯之謂也」という表現もあるってことだ。ついでに覚えておけよ。

◎ポイント……倒置を示す構造助詞「之」は、よく用いられる形式がある。

・(之) 此之謂也。(是) 之謂也。(斯) 之謂也。(

▼(之とは、) 此を之れ謂ふなり。(是を之れ謂ふなり。(斯を之れ謂ふなり。)

▽(之とは、) このことをいうのである。

↓「此^{これ}之^の謂^い也^{なり}」「此^こ之^の謂^い也^{なり}」と読んで、「この意味だ」「この意味だ」と訳すこともある。

・^{トハ}此^コ之^ノ謂^フ乎^カ。(是^{コレ}之^ノ謂^フ乎^カ・斯^{コレ}之^ノ謂^フ乎^カ。)

▼^{トハ}此^コ之^ノ謂^フ乎^カ。(是^{コレ}之^ノ謂^フ乎^カ・斯^{コレ}之^ノ謂^フ乎^カ。)
▽^{トハ}此^コ之^ノ謂^フ乎^カ。(是^{コレ}之^ノ謂^フ乎^カ・斯^{コレ}之^ノ謂^フ乎^カ。)

↓「此^{これ}之^の謂^い乎^か」「此^こ之^の謂^い乎^か」と読んで、「この意味だ」「この意味だ」と訳すこともある。

やれやれ疲れた。

今日の講義はここまでじつじつ。